

英語教育における高大接続について ～高等学校と大学における授業改善の接続を目指して～

調子和紀

川崎医科大学 語学教室

(平成28年10月12日受理)

High School/University Articulation in Teaching of English
- Aiming at an Effective Connection regarding the Improvement
of English Teaching between High School and University -

Kazunori CHOSHI

Linguistics Department, Kawasaki Medical School

(Received on October 12, 2016)

抄 録

グローバル化する社会において、外国語、特に英語運用能力の向上が求められている。大学において学生は高等学校教育の延長として英語を学ぶこととなるが、高等学校における英語教育の現状や授業改善についてはあまり知られていない。また、高等学校側からすれば大学入学者選抜改革やアドミッション・ポリシーとの関わりにおいて、授業改善に取り組まねばならないことは理解しているものの、改革の波の影響力を測りかね、積極的になれないのも現実である。

本稿では高等学校における英語の授業改善の現状と本学で今年度から始めた授業改善に焦点を当て、高大接続における英語教育の現在と将来の可能性について、具体的な授業方法を例に述べる。

キーワード：グローバル化, 高等学校, 授業改善, アドミッション・ポリシー, 高大接続

Abstract

In the globalized society, it is essential to improve the ability of foreign language skills, especially English. Students at the university continue to learn English after graduating from senior high school, while teachers are not familiar with what and how English classes are being practiced and improved. High school teachers understand that they have to improve their teaching methods. On the other hand, they cannot accelerate the pace of the improvement of English teaching mainly because they do not exactly know how much the university entrance examination will change in relation to policy for acceptance of admitted students.

I will focus on the current improvement in teaching English at senior high schools as well as the improvement we have just started at Kawasaki Medical School. Also, I will mention what is being carried out in English teaching now and what will be possible in the near future under high school/university articulation.

Key words: globalization, senior high school, improvement of English teaching, policy for acceptance of admitted students, high school/university articulation

1. はじめに

文部科学省が平成28年3月31日付で発表した『高大接続システム改革会議「最終報告」』¹⁾によれば、これからの時代に向けた教育改革を進めるに当たり、身に付けるべき力として特に重視すべきは、(1)十分な知識・技能、(2)それらを基盤にして答えが一つに定まらない問題に自ら解を見いだしていく思考力・判断力・表現力等の能力、そして(3)これらの基になる主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度(「学力の3要素」)であるとし、この(1)~(3)の全てを一人一人の学習者が身に付け、予見の困難な時代に、多様な人々と学び、働きながら、主体的に人生を切り開いていく力を育てるものにならなければならない、と報告されている。

また同報告書では大学教育改革について大学入学以前に「学力の3要素」を基に学習してきた学生に対して各大学が、「卒業認定・学位授与の方針」(ディプロマ・ポリシー)、「教育課程編成・実施の方針」(カリキュラム・ポリシー)、「入学者受入れの方針」(アドミッション・ポリシー)の一体的な策定を行い、三つの方針に基づいて多様な学生が新たな時代の大学教育を受けられるようにすることを求めている。

さらに高等学校教育改革について、これからの時代に求められる資質・能力を育成するという観点に立った高等学校の教育課程の見直しと小中学校において実践が積み重ねられてきたグループ活動や探究的な学習等の学習・指導方法の工夫の延長上に、受け身の教育だけではなく課題の発見と解決に向けて主体的・協働的に学ぶ学習(いわゆる「アクティブ・ラーニング」)の視点からの学習・指導方法の抜本的充実を図るなど、学習・指導方法の改善を進めることが必

要である、としている。

ここでは高大接続システム改革全体を論ずることはできないので、高大接続の入口部分に当たる大学入試改革とアドミッション・ポリシーの部分に焦点化し、特に高等学校外国語(英語)教育における変化と実践事例について述べ、英語教育における高大接続の現在と将来の可能性を俯瞰してみたい。

2. 高等学校における授業改善の取組

高等学校では平成25年度から実施の学習指導要領²⁾において「授業は英語で行うことを基本とする」こと、「英語による言語活動を行うことを授業の中心とする」こと、そして「授業を実際のコミュニケーションの場面とする」ことが強調され、それに即した授業改善が必要不可欠になっている。

そして「最終報告書」からさかのぼる平成25年12月13日付に文部科学省が発表した「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」³⁾によれば、グローバル化に対応した新たな英語教育の在り方として高等学校段階では、

- ・幅広い話題について抽象的な内容を理解できる、英語話者とある程度流暢にやりとりができる能力を養う

- ・授業を英語で行うとともに、言語活動を高度化(発表、討論、交渉等)する

とし、平成32年開催の東京オリンピック・パラリンピックを見据え小・中・高等学校を通じた英語教育全体の抜本的充実を図ることを計画している。

筆者は昨年度まで高等学校教諭・指導教諭として外国語(英語)の指導にあたり、学習指導要領と実施計画に即した指導の研究と実践に取

り組んできた。特に言語活動の高度化に向けた取り組みとして、「読む」・「聞く」のインプット活動と、「書く」・「話す」のアウトプット活動を統合した言語活動を重視した授業を実践することで、高度化に至る下位技能の育成を目指してきた。次にその例を挙げる。

2.1. ディクトグロス(dictogloss)

ディクトグロス⁴⁾はWajnryb(1989)が提唱した英文再生の手法で、基本的に次の手順で行われる。

- a. 学習者に短い文章が普通のスピードで（2回）読まれる
- b. 読まれている間に、学習者は知っている語句のメモを取る
- c. 小グループで、学習者は自分たちの断片的な知識を共有し、元の英文を再生する
- d. それぞれのグループの再生文は、文法的な正確さや結束性は求められるが、原文の複製でなくてもよい
- e. 再生された文は分析・比較され、学習者は共有した調査や議論を基に自分の英文を修正する

この活動は主に、「聞く」から「書く」ことの技能を統合した言語活動を引き出す。c.の段階で、グループ内での英語による「コミュニケーション」が発生し、「話す」活動にもつながる。また学習者に対して文法の意識化を促すことにつながり、「書く」ことによるアウトプット時の正確性の向上に役立つ。

2.2. ストーリー・リテリング(story-retelling)

ディクトグロスが最終的に「書く」ことで内容を再生するのに対して、読んだり聞いたりした内容についてその内容を理解するとともに、自分で取ったメモなどを基に「話す」ことで再

生する活動である。産出活動において「話す」ことに重点を置くため、流暢さと即興性の促進につながり、プレゼンテーション能力やその後の質疑応答に対応するスキル向上に役立つ。また、ある程度長い英文や、同じテーマに関して複数の観点から見た英文を読む場合に、アクティブラーニングの手法の一つであるジグソー法(図1・2)を用いた内容理解活動ができる。この場合、エキスパートグループ内で相互に理解した内容をジグソーグループ内で教え合う際に、ストーリー・リテリングを有効に活用することができる。

ジグソー法を用いた英文内容理解活動のイメージ

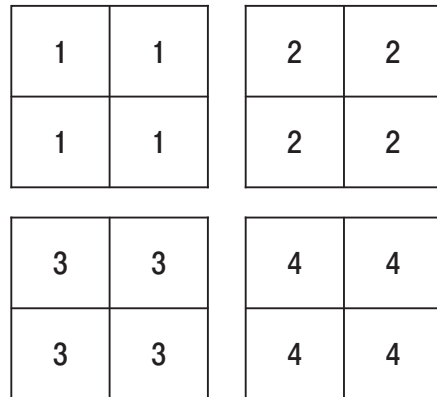


図1 【第1段階】エキスパートグループにおいて、担当部分（同一内容）を協働して理解する

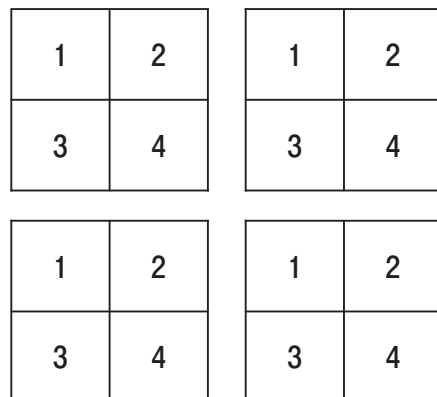


図2 【第2段階】ジグソーグループに分かれて、エキスパートグループ内で理解した内容を教え合う

2.3. 要約(summarization)

要約活動は「読む」ことを通して内容理解した情報をトピックセンテンスやキーワード等で構成されたメモなどを基に書かれた内容のポイントを「書く」ことによりアウトプットする活動である。この活動では、内容理解からポイントになる情報を取捨選択するとともに、難しい語彙を平易な表現に書き換え(パラフレーズ)などを行いながら本文の2分の1から3分の1の分量で書くことになる。この過程を通して内容面での深い理解を促すだけでなく、語彙や文法などの言語形式にも注意を払うことに意識を向けさせることができる。

3. 本学における高大接続を意識した授業改善の取組

長谷川ら(2015)⁵⁾の調査研究により、本学学生の英語学習に対する意識として、「英語に対する関心が高い反面、苦手意識を有する学生が多い」こと、英語学習に対する意識については「医学生による英語学習の必要性に対する認識は高く、英語学習についてある程度の目標観を有している」こと、などがわかっている。また課題として、「学生が関心を持って取り組める題材の選定や、「読む」・「書く」・「聞く」・「話す」の4技能の基礎力を着実に強化するための言語活動の検討」を挙げている。

今年度はこの調査を基に語学教室の講座編成を大幅に変更した。

まず、1年生から4年生におけるすべての英語授業を、各クラス20名程度の6クラス編成で行うこととした。20名程度のクラス編成で授業を行うことで、ペア活動やグループ活動を活性化させることを目指すだけでなく、各学習者に、よりの確で詳細なフィードバックを提供することを目指す。また60分3コマの授業を「リーディング」、「リスニング」、「ライティング」の3つに分けながら、それぞれをベースに技能統

合した言語活動を導入することで、各技能を総合的に育成することを目指している。

「リーディング」では2.3.で取り上げた要約活動に取り組みせたり、部分的にはあるが2.1.ディクトグロスにも取り組みせたりすることで、インプット活動である内容理解だけでなく、アウトプット活動へと連動させる。

「ライティング」ではパラグラフライティングの基礎的な知識を教えながら、1年生から4年生までの学生に300語から500語のエッセイを書かせるとともに、2年生から4年生では書いたエッセイを基に、3分から5分でプレゼンテーションを行うなど、実践的な活動を行うことで、高い目標設定と、その達成につながる段階を踏んだ指導を目指している。

また、「リスニング」の授業では、グループ活動として、相手の書いた英文内容を聞き、それを基に即興で内容確認のための質疑応答を行い、最終的に相手の書いていた内容を要約し、その優劣を競う「サーキットスピーチ」という活動にも挑戦した。この活動は4つの技能を統合的に活用しながら行う活動であり、2で述べた「言語活動の高度化」に直結する活動になっている。

これらの言語活動はフォーカス・オン・フォーム(Focus on Form)と呼ばれる、「アウトプット活動における必要な場面で、意味を中心にした言語理解に言語形式や言語機能の結びつきを理解することが言語習得を促す」という定義に基づいたものである。

4. 第二言語習得研究との関わり

村野井(2006)⁶⁾によれば、第二言語(L2)習得における認知プロセス(内的変化)は、次の4つの段階を経て段階的に学習者の言語知識として定着し、最終的にアウトプットする能力、つまりL2を理解、産出両面で運用する能力に至る。

1) 気づき(noticing)

インプットの一部に学習者の注意が向けられた場合、そのインプットは「気づかれたインプット」(noticed input)になる。この場合の注意とは学習者が自分の耳や目を通して入ってくる言語項目(語彙項目、文法項目、音など)に気づくことを意味する。

2) 理解(comprehension)

「気づかれたインプット」の言語形式、意味、機能の結びつきが理解された場合、それは「理解されたインプット」(comprehended input)となる。フォーカス・オン・フォームがL2習得を促進するのは意味、形式、そして機能の3つが同時に処理されるためであると指摘されている。

3) 内在化(intake)

これは第1・第2段階を経た言語項目を同化し、吸収する過程である。「理解されたインプット」がコミュニケーションを目的とした言語産出に使われるようになると、それは学習者の中間言語(学習者言語)システムに取り込まれ始めたことであり、「内在化」のプロセスが進んでいると考えられる。このように内在化された言語知識は「インテイク」(intake)と呼ばれる。

4) 統合(integration)

これは、学習者内部に育った言語知識が、さらにしっかりと学習者の中に統合される変化である。気づき、理解、インテイクというプロセスを経て、学習者内部に育った中間言語知識(interlanguage knowledge)が、学習者の言語運用をつかさどる中間言語システムの一部となるプロセスが統合である。

この統合を促進するためには、実際にL2を使用する、特にアウトプット活動を行うことがきわめて重要である。話したり、書いたりすることによって、言語項目を自動的に使いこなす能力が伸びると考えられている。

5. まとめ

高大接続において、特に大学入試に関する高等学校、大学双方の意見はおおむね次のようになる。

・高等学校側

学習指導要領が変わり、授業改善に取り組みねばならないと言うが、大学入試が変わる気配がしない。まず大学入試が変わってくれなければ、高校段階での授業を本当に変える必要があるとは思えない。

・大学側

学習指導要領は新しくなったが、高等学校での授業が変わったのかどうか分からない。現状で大学入試を変える必要があるとは思えない。

英語の学習指導において「王道」が存在するわけではないが、文部科学省が掲げる英語教育改革と高等学校で現在取り組んでいる授業改善、そして大学段階で求められる英語運用能力に関する到達目標と達成に向けた取り組みは、実はしっかりとつながりを持っていることがわかる。現在大学においては、「何を教えたか」から「どういう人材が育っているか」という「アウトカム評価」が求められている。実は、高等学校においても高等学校卒業時における学習到達度目標を設定し、どのような人材を育てるかという視点からの生徒育成が求められている。

これは筆者の実感であるが、外国語(英語)教育において、今ほど高等学校段階と大学段階で両者が解決すべき課題が一致している状況はなかったのかもしれない。今後は本学において教育実践を継続していくことになるが、高等学校での実践経験を生かしつつ、高大接続の現在とこれからをしっかりと見つめながら、本学学生に求められる英語運用能力の向上について、具体的な改善を推進していきたいと考えている。

参考文献

- 1) 文部科学省：高大接続システム改革会議「最終報告」
http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/__icsFiles/afieldfile/2016/06/02/1369232_01_2.pdf (2016.9.2)
- 2) 文部科学省：高等学校学習指導要領解説 外国語編・英語編. 東京, 開隆堂出版. 2010, pp 50-51
- 3) 文部科学省：グローバル化に対応した英語教育改革実施計画
http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/__icsFiles/afieldfile/2014/01/31/1343704_01.pdf (2016.9.2)
- 4) Wajnryb R : Grammar Dictation. Oxford, UK, Oxford University Press. 1990, pp 5-6
- 5) 長谷川真紀, 尾崎千夏：医学部生に対する英語学習に関する意識調査. 川崎医学会誌一般教養編 41:47, 2015
- 6) 村野井仁：第二言語習得研究から見た効果的な英語学習法・指導法. 東京, 大修館書店. 2006, pp 9-16